東アジアにおける中国大陸と日本列島
——文化比較のための江南調査——

中　本　正　智

1.　中国大陸と周辺域

東アジアの文化の形成をみると、視野の中心に中国大陸があり、そこに中国という強文化圏を形成し、これが周辺の弱文化域に波及して周辺諸国を形成するというかたちで、歴史は発展してきている。

中国大陸は東アジア文化の中核的な存在であり、中国はもちろんのこと、その周辺諸国の文化をみるときに、その基盤となるところである。中国大陸の周辺をみると、北にモンゴルがあり、東北に朝鮮半島があり、東海の沿岸部に日本列島と琉球列島が連なっている。中国大陸は南のインドシナ半島と連なり、これを包むように南シナ海を形成しながら、台湾、フィリピン、マレーシア、インドネシアへ連なっている。中国大陸は、こうして太平洋沿岸部に、北の朝鮮半島や日本列島を頭に、南のマレー半島やインドネシア諸島にいたる無数の列島群に囲まれていることになる。

国境は人為的なまとまりであるから、時代的にみて、国力の拡脹や縮少に伴なって変化するのは当然だ。国境が不変的であるうえに、しかも、かならずしも文化はこの人為的な境界に左右されるものではない。

文化は国境を越えて広がっていく。強文化圏が成立すると、そこから周辺の弱文化域へ文化が流れはじめ、文化の一環である言語も流れていく。5千年から6、7千年も前に、すでに強文化圏を形成していた中国大陸は、古くからその周辺域へ文化の流出があったとみるのが自然である。

7世紀以降の日本文化の形成をみると、中国大陸からの文物の影響を無視することはできない。それは社会機構の整備、神社仏閣や住居などの建造物、思想の形成といった文化事象のありとあらゆる分野に影響を及ぼしており、その根幹をなす言語の形成、文字の定着による表記法の確立、文化摂取にともなう語彙の増加など、大陸文化によって文化の多くの面が触発されていった。それは単に対等な両者間の借用といった性質のものでなく、文化の核心を形成するほどの深い関係を結ぶものであったとみるべきである。日本語の文字体系や語彙体系をみてわかるように、言語構造の深部に関わる性質のものであった。

中国大陸の東方沿岸をみると、黄河の河口に渤海があり、楊子江は東シナ海にそそ

いで江南の文化を発展させ、閩江は福州を発展させている。さらに南の西江は広東の文化を培い、その下流に香港、マカオを発展させている。こうして大陸の沿岸部をながめていると、それぞれの河口の地域は、古くから国際都市として発展してきたことが諒解される。

東アジア文化をトータルでとらえようとすると、これら河口に発展した都市群の役割を検討してみなければならない。日本列島の文化をとってみると、楊子江流域と黄河流域との交流が重要となってくるし、琉球列島の文化を考えてみると、閩江の流域に拓けた福州との交流が重要となる。南の西江流域に拓けた広東や香港は、マレーシアやシンガポールにたえず影響を及ぼし続けている。

東アジア文化を形成したものの中には中国大陸から強文化圏として広がっていった波があったことを否定できない。その波はいつの時代にも国境を越えて広がっていった。

それは漢字文化ひとつとってみてもいえることだ。漢字は漢語を写すための文字として発展したのであったが、それにとどまらず、言語のちがいを乗り越えて、周辺諸国に受け入れられ、それぞれの受容国の文化事情に合致するように改変され、発達していったのである。漢字は文化の象徴的な一つの事柄なのであって、文化全体が漢字と同じ道筋をたどって周辺諸国に流出し、それぞれの国の文化形成にあずかったであろうことが推測されるのである。こう考えてくると、日本列島はもちろんのこと、周辺諸国の文化をみるとき、中国大陸文化との比較研究がいかに大切であるかということが諒解されるはずである。その比較研究は、影響関係を明かにするのはもちろんだが、事によると、影響関係よりも深部にある構造の形成にかかわった面をも明らかにする可能性をはらんでいる。

2. 江南調査の意義

中国大陸の東方及び南方の沿岸は、古くから国際都市として拓けていたから、これらの沿岸は周辺諸国とのつながりが深い地域である。

日本列島の地理的条件をみてわかるとおり、楊子江の流域、とくにその河口にある寧波は、日本文化の形成にとって重要な地域であった。寧波は日本からの遣唐使たちが上陸し、また船出した港であった。中国大陸と日本列島のつながりからみると、そこはちょうど親子の臍のように、強い絆で結ばれている地点であった。日本文化を知るために、楊子江の河口あたりの文化が調査価値が高いのは、そのためである。

さらにさかのぼって、太古において楊子江の河口あたりはどうであったか。考古学

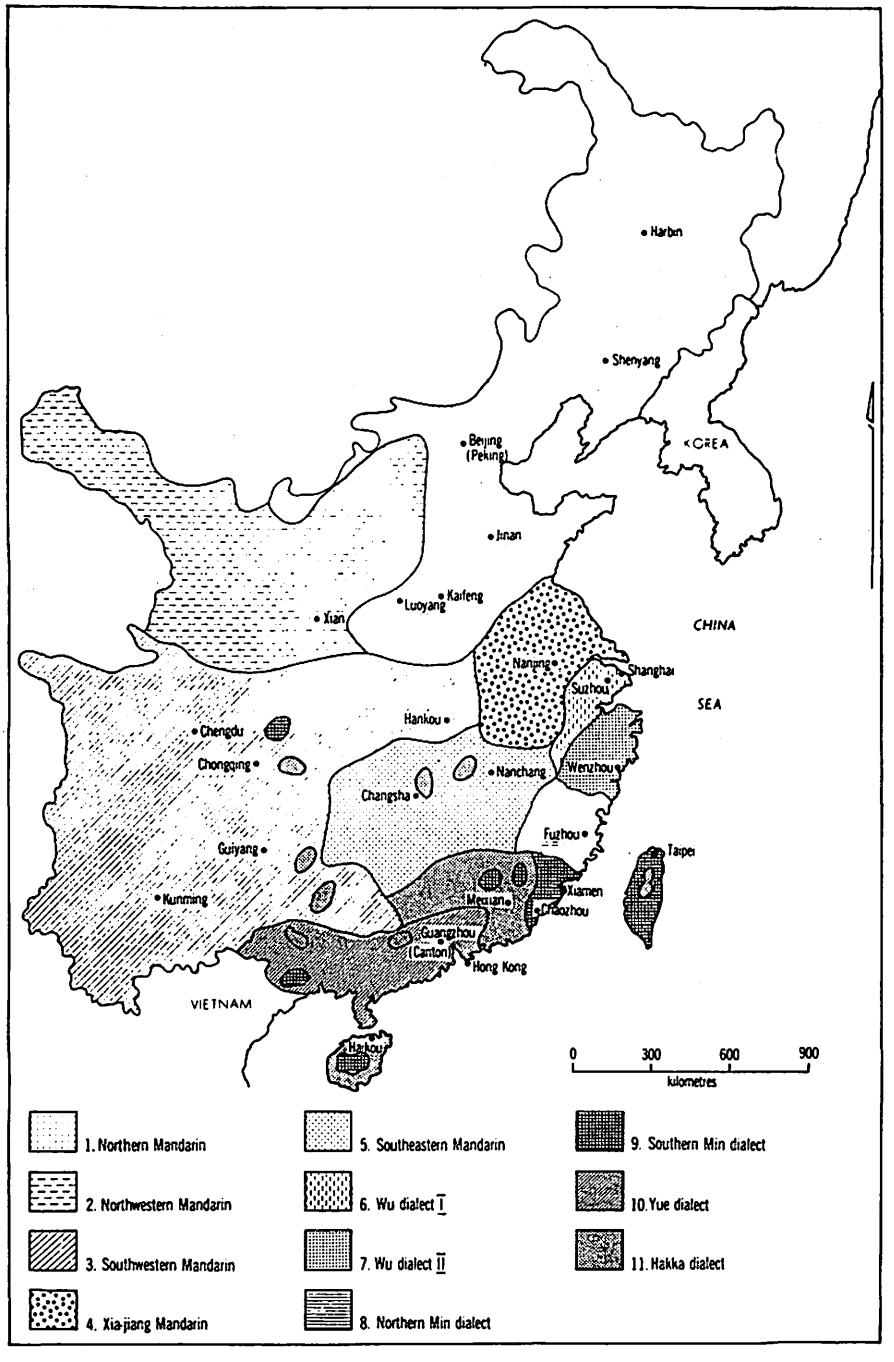

FIGURE ***Map of Chinese Dialects***

的に河姆渡遺跡などからいえることであるが、そこら一帯は、良渚文化を開花させた地域であった。その文化の特徴をみると、母系制社会をもち、太陽神をあがめ、稲作を営む民族であったことがわかっている。

楊子江は文化の道として重要な役割をになっていた。上流にさかのぼるとシルクロードの起点になるし、河口は東シナ海にそそいでその沿岸に文化を運んでいった。日本列島はその一環の地域とみることもできる。

いうまでもなく、琉球列島はさらに南方に位置しているから、閩江の河口に拓けた福州との関係が緊密であった。この中国大陸との関係のありかたが、日本列島と琉球列島との文化差をもたらしたと考えるのが妥当のようである。

3. 中国大陸の言語分布

中国大陸の言語は、複雑に分布しているが、大きく中国語系と少数民族諸語系に分かれる。中国語系は五つの方言群に分かれ、北方と内陸部に広く分布する Mandarin(官話)、東シナ海に面する Wu（呉）と Min（閩)、南シナ海に面して内陸まで入り込む Hakka（客家）と Yue（粤）の方言がある。現代中国の普通話は Mandarin に基礎を置いた言語である。

このほかに、いわゆる少数民族と称されている人たちの言語があるが、これらはみな別系統の言語であって、主なものだけでも、蒙古語、ウイグル語、チベット語、満州語、朝鮮語、チワン語、ヤオ語、ミヤオ語などがある。程度の差こそあれ、これらの言語もいくつかの複数の方言を包みこんでいる。

中国大陸は、南船北馬という言葉に象徴されるように、南方と北方で大きな文化差を示す。それは中国人仲間でもカルチャーショックを受けるほどだ。言語差もはげしく、中国語系内でも、北から南へ変化していって互に通じないほどの差を示すに至る。呉越同舟という言葉の背景には、このような文化差があったのである。

4. 若干の語彙比較からみた特徴

楊子江の河口に近い蘇州、杭州、寧波は、日本列島の文化と密接にかかわっている地域である。この地域の方言は呉方言系に含まれるものである。若干の語を比較してその特徴をのぞいてみよう。特徴を明瞭にするために、北方の北京と南方の広州の方言を加える。

親族語彙の基本的な父母について比較してみる。

	（北京）	（蘇州）	（杭州）	（寧波）	（広州）
＜父＞	$p^{ʔ}$a	jə:	appa	$t^{ʔ}$ja:$t^{ʔ}$ja	apa
＜祖父、父系＞	je:je	atjio	$at^{ʔ}$ia	aja	jeje

中国語の父を表す語は、$p^{ʔ}$a:、appa、apa などの$p^{ʔ}$a 系とjə:の jə 系と$t^{ʔ}$ja:$t^{ʔ}$jaの$t^{ʔ}$ja系である。$p^{ʔ}$a系は Mandarin にあり、jə系と$t^{ʔ}$ja系は呉方言にある。

日本列島をみると、青森、岩手、八重山に父を表す語としてajaがみられる。これは呉方言のjə系と対比される。

津軽と秋田に父を表す語としてadʒaがあり、中国江南の呉方言の$t^{ʔ}$ja系と対比される。同様に、琉球列島に父を表す語として、atta:,adʒa:、tʃ^{ʔ}attʃ^{ʔ}a:などがあり、これらは呉方言の$t^{ʔ}$ja系と対比される。

日本語に父を表すtiti（→tʃitʃi）、tete、toto があるが、いずれも呉方言の$t^{ʔ}$ja系に対比される。

中国語の祖父を表す語として、je:je、ajaなどのja系があり、atjio、$at^{ʔ}$iaなどの$t^{ʔ}$ia系がある。

おそらく、ja系は、父を表すjə系と同系の語であり、$t^{ʔ}$ia系は、父を表す$t^{ʔ}$ja系と同系の語であろう。親族語において、年層の低い語から高い語へ意味が推移していくのが一般的な変化傾向であるからである。

日本列島をみると、祖父を表す語として、一般にdʒi:、dʒidʒiがあり、琉球列島にadʒi:、dʒa:dʒa:がある。古代語の「おほぢ」（祖父）は、「おほ」（大）と「ち」（父）が結合したものである。日本語の祖父を表す語は、父を表す語から発達したことが知られる。これらの語は、呉方言の祖父を表す$t^{ʔ}$ia系や父を表す$t^{ʔ}$ja系と対比される。

	（北京）	（蘇州）	（杭州）	（寧波）	（広州）
＜母＞	ma:	ɲa:	m:ma	am;mma	ama
＜祖母、父系＞	nainai	abu:	aɲa:	aɲa	mama

中国語の母を表す語は、ma:、m:ma、mma、amaなどのma系と、ɲa:のɲa系である。Mandarin で ma 系であり、呉方言でɲa系である。日本列島をみると、母を表す語として uma または umma が山形、三重、奈良に分布し、amma:が琉球に分布している。奈良朝期の古代語である「おも」「あも」はこれらとつながる語である。これらは Mandarin の ma 系と対比される。

琉球列島をみると、母を表す語として、宮古や八重山にʔanna、ʔaɲɲa、aɲniがある。これらは呉方言のɲa系と対比される。

中国語の祖母を表す語としてabu:やmamaのmu系、aɲa:、aɲa、nainaiのna系がある。おそらく、mu系は母を表すma系と同系であり、na系は母を表すɲa系と同系であろう。

日本列島の祖母を表す語として、琉球八重山にappaがあり、長崎五島や鹿児島にumba、琉球与那国にabu、琉球沖縄北部にpa:pa:、bappa、ʔuppaなどが分布している。これらの語は、呉方言のmu系に対比される。

琉球列島に祖母を表す語として、奄美にʔanne:、ʔani:、haɲɲe:、hanni:などが分布している。これらの語は、呉方言のna系と対比される。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<蛇>	ʂə:	sɔ:	sɔ:	dʒɔ:	se:

中国語の蛇を表す語は、ʂə:、sɔ:、se:のse系と、dʒɔ:のdʒɔ系がある。日本列島では、miやhemiまたはhebi、çebi、ʃebiの和語系のほかに、字音語のdʒaがある。この字音語は、まさに寧波のdʒɔ:につながる語とみてよいでろう。

	(北京)	(蘇州)	(杭州)	(寧波)	(広州)
<舌>	ʂʂwa:tʰou	sətʔei	sətʔə:	ʃietʔai	sit; lei
<尾>	weipʔa	³ji:pʔɔ:	mipʔɔ	ɲipʔɔ	meipʔa

舌を日本列島ではʃitaという。この語はいわゆる大和言葉なのだが、なぜか中国の呉方言と対比してみると、よく類似している。これはいったい何を意味しているのであろうか。

尾を日本列島ではwoppoまたはʃippoといい、単にwoともいう。これらの和語も中国諸方言と類似しているとみられなくもない。いうまでもなく、「尾」の字音語であるビは、中国諸方言のmiやmeiと対応しているとみてよい。

5. 和語系と漢語系の間

中国大陸と日本列島の言語比較を進めていくと、今まで日本語を単純に和語系と漢語系に分けていたが、これが必ずしも分明でなく、確たる根拠があっての分類でない

ことがわかってきた。

中国語と日本語は現時点で比較すると、言語構造を異にしている。したがって、中国大陸の言語と日本列島の言語の間に類似があれば、借用関係の語であると結論される。たしかに多くの語が借用関係にある。

しかし、純粋に和語系の語と考えられている語の中に中国大陸の言語と類似することがある。これらは偶然の一致とみるべきであろうか。

日本列島に文字をとり入れるはるか以前に、中国大陸の言語が日本語の構造を形成するところで関与していたことを示しているのではないかと疑ってみることも許されてよいであろう。とくに、江南地域の言語と日本語との対比研究によって、新しい東アジア研究の道が拓けてくると期待されるのである。

このような視点から、中国大陸の言語と日本列島の言語を対比研究してみることは、緊急の現代的課題である。

＜注＞ここで用いた中国語資料は、大学院生劉麗君とともに江南調査を実施したときに得たものである。

／参考文献／

Shopen, Timothy, ed. 1979. "Languages and their status" Cambridge, Mass.
中本正智、1981.『図説琉球語辞典』金鶏社
————、1985.『日本語の系譜』青土社

（なかもと・まさちえ　東京都立大学教授）